

<研究ノート>

西洋の翻訳理論の重要論点とその社会文化史的連関

Important Issues in Western Translation Theories
and Their Correlation in Socio-Cultural History

河原清志

Kiyoshi Kawahara

(金城学院大学)

(Kinjo Gakuin University)

Abstract

This paper discusses five important issues in Western translation theories, i.e. equivalence, skopos, norm, foreignization and cultural translation, and analyzes them in light of Western socio-cultural history. First, I introduce major five categories of Western translation studies in relation to those five issues: (1) linguistics-oriented equivalence theories, (2) social function-oriented equivalence theories, (3) equivalence-fallacy theories resulting from social/ideological turns, (4) equivalence-transcendence theories (in the thought and philosophy of translation), and (5) theories of translation equivalence-diversity. Next, I analyze the socio-cultural contexts in and behind which a variety of translation theories arose. Since the most fundamental concept in Western translation studies is “equivalence,” this concept is examined from a broader perspective starting from the Middle Ages. The features of each of the five important issues are further analyzed critically from a semiotic point of view. Lastly, I propose the importance of a principle of self-criticism by which one can relativize one’s own theory as well as “others” so that this paper might itself avoid falling into the naïveté of Western criticism.

1. はじめに

近時、日本でも翻訳研究が進展しているが、その土台となっているのはかなりの程度、1970年代から理論的展開を遂げてきている西洋の翻訳研究^{註1}である。日本の近現代の知の構造が西洋からの広義の翻訳による知の体系に依拠していることは論を俟たず、日本の翻訳研究でも日本の近代の翻訳のあり方が盛んに議論されている。であるならば、今、まさに現代の広義の翻訳による西洋の翻訳理論の輸入・受容状況について振り返り、同時代的なメタ理論分析を行っておく必要性は十分にある。そこで、本稿は現時点で日本の翻訳研究に大きく影響を及ぼしていると思われる、西洋で盛んに議論されてきた翻訳理論の重要論点である①等価、②目的、③規範、④異化、⑤文化翻訳と、その議論が展開された社会文化史および相互の連関について一考察を記してみたい。

2. 西洋の翻訳研究の大きな流れと等価五類型

翻訳研究の5つの論点の検討に入る前に、翻訳研究の潮流と諸論点にどのようなものがあるか概観しておきたい(以下、一部は河原, 2014a を簡略化して再掲する)。一般的に、翻訳とは異なった二言語間の言語変換であると考えられており、第一段階として、1970年代ぐらいに入ってから、はじめは多面的・複層的・多義的な翻訳行為のうち「言語テキスト」の側面(翻訳行為の言語的側面)に焦点を当てた諸学説が展開された。具体的には「等価」概念を中心に、「翻訳シフト」「翻訳方略」^{註2}「翻訳プロセス」などの議論が展開した。そして、第二段階としてこれに社会行為性が加味された「テキストタイプ論」「目的(スコポス)理論」「レジスター分析」「多元システム理論」「翻訳規範論」なども並行して盛んに議論されている。このいわば翻訳研究における「言語理論」は「等価論」に対する批判を含みつつ、目標言語における翻訳の社会機能を基軸に論を展開してきたと言える。

第三段階としては、これに対して「社会行為」としての翻訳の側面を看過していると全面的に等価概念を否定し批判するのが、主に文化的・イデオロギー的転回を遂げたとされている翻訳研究の諸学説群である。Bassnett & Lefevere (1990)、Cronin (1996)、Snell-Hornby (2006)、Pym, Shlesinger & Jettmarová (2006) などがそれである。これらは翻訳行為の言語的側面から目を社会的・文化的・政治的コンテキストのほうへ向けた研究を展開するものである。これらの研究の下位分野として、たとえば Munday (2008/2012) は「書き換えとしての翻訳」「ジェンダーの翻訳」「ポストコロニアル翻訳理論」「翻訳の(不)可視性」「翻訳の権力ネットワーク」などを挙げているが、他にもさまざまある(河原, 2011)。これらは翻訳研究における「文化理論」と位置づけられ、言語的な等価だけに議論の焦点を当てることを批判するいわば「等価誤謬論」とであると位置づけられるであろう。

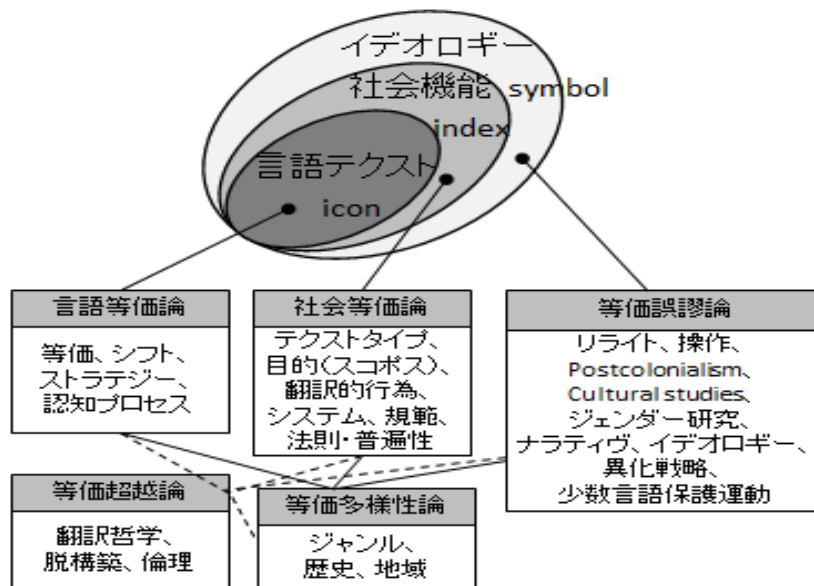
以上が翻訳研究における「言語理論」と「文化理論」の大きな潮流であり、後者が前者を敵視し周縁化するくらいもある(Munday, 2012, pp. 207-208)。ところが一部には、翻訳研究の言語学への回帰の主張も見られる(Vandeweghe, Vandepitte & Van de Velde, 2007)。このように翻訳研究は大きく見るとその分析対象の基軸を言語テキスト中心か社会文化的コンテキスト中心かの二極の間を揺れながらも、各学説は翻訳行為のある局面に照準を合わせて理論化を行ってきた。つまりは翻訳研究全体を射程に入れた、いわば「全体の学知」をやや見失いながら、各研究者が自身の置かれたコンテキストで自身の社会的必要性から自身の問題関心のなかで理論化を進めてきたとも言える。

これらの学説状況を踏まえたうえで、さらに翻訳哲学・思想と翻訳多様性を論じる諸学説をも射程に入れる必要がある。まず翻訳哲学・思想は、翻訳が前提とする意味の伝達という前提的イデオロギーを原理的に問い直す知的運動として考えられる学説群である。意味が等価裡に異言語間で転移するという発想は、西洋合理主義の中心をなすプラトンの絶対主義・ロゴス中心主義の哲学が土台になっているが、そこには原理的に超克できぬ「他者性」「異質性」「よけいなもの」が確かに存在する(デリダ, 2001[1996]; ルセルクル, 2008[1990]の思想を参照)。そこで等価概念では到底解決のつかない<異なるもの>とどのように向き合い超克するか、つまり等価をどう超越す

るかという点に翻訳者の使命があると考えられる地平である。また、翻訳多様性をめぐる諸学説は、翻訳をめぐるテキストとコンテキストの多様性に焦点を当てた理論群で、翻訳の分野・ジャンルの多様化、そして主に翻訳史という時間軸と、地域別という空間軸との様々な交点が織り成す翻訳コンテキストの多様性を社会文化史と連動させて論じるものである。

以上を踏まえつつ、等価概念を基底にして西洋の翻訳研究の諸学説を類型化すると、①言語等価論：言語テキストをめぐる学説群、②社会等価論：目標言語における翻訳の社会機能をめぐる学説群、③等価誤謬論：翻訳の社会文化的イデオロギー性をめぐる学説群、④等価超越論：翻訳哲学・思想に関わる学説群、⑤等価多様性論：翻訳のジャンルやテキスト・コンテキストの多様性に関する学説群、の五類型となる。このような類型化を措定することで、翻訳研究全体の布置を俯瞰的に見定めることが可能となる。この五類型と各類型の下位にある諸論点を一覧にすると、次の図1になる^{註3}。

図1: 翻訳理論のメタ分析枠組みの記号論的布置



3. 翻訳等価性への諸アプローチの社会文化史

3.1 西洋の翻訳史における言語間の覇権上の等価関係

現代の日本という時空において翻訳等価を論じるには、まず翻訳(研究)史上、等価という概念は存在しなかったにしても、西洋において等価がどのように捉えられていたかについて考察したのち、等価概念を相対化してみる必要がある。そこで本節では、近代的な言語観(言語イデオロギー)が成立する以前の歴史についての概観を素描する(小山, 2012; ピム, 2011 に依拠している)。

1. 西洋の中世および近世人文主義の体制下では、聖書が書かれた言語であるラテン語(およ

び旧約聖書の言語であるヘブライ語、新約聖書の言語であるコイネーギリシア語^{註4)}と俗語(英語、フランス語、ドイツ語など)との間には言語の威信の階層のなかでの(近代的な言語相対主義が説く意味での)等価性(対等性)は存在せず、前者は後者よりも正しく純粋なものだと考えられていた^{註5)}(小山, 2012、cf. ダイグロシア)。これを翻訳方略の次元で論ずると、例えば 12 世紀のイスパニアでは、アラビア語からラテン語に訳された前科学のテキストは直訳主義が広く見られた。当時、原文理解が困難な際の方略として直訳主義が採用されたためであるが、当時信奉されていた言語の階層によって神に近い、それゆえ神聖な言語から低い言語への翻訳の方略としても直訳が採られていた。他方、同時に直訳主義の翻訳は理解しにくいと、解説を施した副次的な科学テキストも存在した(ピム, 2011, pp. 462-463)。

2. 大航海時代以降は、世界各地で発見された諸言語に対し、西欧帝国言語(スペイン語、ポルトガル語、フランス語、英語、オランダ語、ドイツ語など)はラテン語などの聖書の言語により近い言語であるとする言語思想が体系化され、19 世紀の社会ダーウィニズム的、かつロマン主義的な言語の発展段階説(人種主義的、帝国主義的言語思想)が展開した(小山, 2012)。これを翻訳方略の次元で論ずると、例えば 16 世紀のヴィベス(L. Vives)は極端な直訳や自由な意識ではない「三番目の範疇」として「事柄と言葉[の両方]に重きがおかれる」等価の祖形のようなものを提案した。この時代は、国家や自国語といった概念や印刷機の発明・発展があり、等価概念を支える起点言語テキストの固定化・安定化が見られたためである。その背後には、人文主義によって諸言語に対等の価値が与えられたという理由がある(ピム, 2011, pp. 462-464)。
3. また、文献学は「真の言語」(聖なる言語)で書かれた文書(聖書など)を、近代西欧言語の標準変種に翻訳することで、等価性(翻訳可能性)を実証的に示し、近代西欧言語の格上げを図った。他方では、未開言語(非西欧言語)の翻訳不可能性を説き、それらを排除するという帝国主義的なオリエンタリズムが見られた。欧州中心主義的な解釈学もこの頃見られた(18-19 世紀には F. シュライアーマハー、W. ディルタイ、20 世紀には M. ハイデガー、H-G ガダマーなど。理解の地平(の融合)において、非西洋は他者化されている)(小山, 2012)。
4. 20 世紀になると、このような帝国主義的な言語秩序は民族主義の台頭、人類学などの展開により批判され、民族言語文化相対主義へと展開する。この近代ナショナリズムの体制では、すべての民族言語は一つの言語として覇権上、等価であるとされる。例えば、欧州統合において超国家的法律や統治のための翻訳が必要となり、言語平等主義という擬制が法的な制度となっている。ここで、欧州言語／非欧州言語の二項対立図式が、言語／方言の構図へとその位相を転ずることとなる。このようにマイノリティへの抑圧という近代ナショナリズムの構図は反復されることが見て取れる。
5. このような社会文化史上の潮流のなかで、現在の言語学、特に言語と社会の関係を正面から包括的に扱う社会言語学、言語人類学、語用論などでは、国民国家概念(nation state)に基づいて「言語」を分節(カテゴリー化)する権力主義的な近代ナショナリズムを反映した言語観、近代ナショナリズムの言語相対主義が暗黙裡に想定してしまっている言語的等価性が批判的に分析されている。

以上が、言語間に見られるこれまでの言語エコロジー内のカテゴリー化、階層化に伴う等価／二項対立図式とそこに必然化されているマイノリティ抑圧の原理である。翻訳は原理的に二言語間を扱い、その 2 つの言語がどのようなものとして捉えられているのか。そこに分析者・研究者の言語イデオロギーが潜んでいる。では、西洋の歴史上、翻訳における等価的な現象がどのようなものであったかについて、次節で説明する。

3.2 西洋の翻訳研究の 5 つの主要論点の社会文化史

では次に、翻訳等価性への諸アプローチの社会文化史について素描し、西洋の翻訳研究全体における諸論点の相互連関や諸学説が生起した社会文化史的背景を見ることで、翻訳諸学説のテキスト(分析対象)とコンテキスト(背景事情)との相互関係を詳らかにする。

翻訳研究の最も根幹に関わる概念はこれまで述べたように①「等価」である(河原, 2014a)。この等価の解体を企てて登場したのが、本稿が言う社会等価論の範疇にある②「目的」と③「規範」に照準を合わせた学説である。等価が本質的に内包している「機能」を取り出して、目標社会での機能に特化・焦点化させたのが「テキストタイプ」「目的・スコポス」「翻訳的行為」であり(尤も、テキストタイプ論は等価の解体は企図していなかった)、目標社会での翻訳の機能を構造主義的・科学的記述主義の立場から構築したのが「システム」「規範」「法則」である。

また、「等価」を単純な本質主義的な形式的等価だと措定し等価自体を否定・解体しようとしたのが文化的・イデオロギー的転回と呼ばれている一連の学説群で、本稿が等価誤謬論と称しているものである(詳しくは、河原, 2014a)。(システム理論の延長線上にある)「リライト」「操作」という論点で論じているものがこれに当たり、翻訳研究内部でのイデオロギー研究、ナラティブ研究もある。また、翻訳研究とは異なる他の学問分野が翻訳研究に進出して、ポストコロニアル翻訳研究、ジェンダーの翻訳研究などを展開している。

あるいは、等価自体のあり方の美学ないし倫理を論点とした④「異質化;異化」^{註6}の議論もある(本稿では等価超越論に位置づけている)。一般的な傾向として、例えばステッコニが翻訳の特徴を記号論の立場から、類似性(起点と目標が似ている)、差異(起点と目標が違う)^{註7}、仲介(起点と目標をつなぐ)^{註8}の 3 つを挙げており (Stecconi, 2004, 2009)、チェスタマンは「近代インド=ヨーロッパ言語では『類似性』の側面に重きが置かれ、それが理由となって、欧州の理論では「等価」が多く議論されている」と言っているように (Chesterman, 2006。訳はピム 2010[2010], pp. 130-131 による)、典型的な欧州の翻訳の捉え方だと、起点言語と目標言語間に存在する政治的・社会的な言語階層において、対等な二つの言語間で「受容化;同化」による翻訳がなされるという考え方が主流であるところ(ピム, 2011)、そのような言語階層において上の階層の(優位な)言語から下の階層の(劣った)言語へ翻訳される場合には、翻訳によって劣った言語の改良を図る「異質化;異化」という翻訳方略が採用されてきた、ないし採用するべきだ、という議論もなされている(例えば、ドイツ・ロマン主義の時代、現代アメリカにおけるラテンアメリカ文学の翻訳、あるいは日本では、明治期における西洋言語からの翻訳など)。

さらには、別の形で等価を解体する動きとして、⑤「文化翻訳」がある。これはポストコロニアル

翻訳研究の潮流に位置するもので、脱植民地化の時代における移民に着目し、起点 vs. 目標という想定を解体し、異種混濁性や文化的複合体から翻訳を比喩的に論じることを趣旨とし、翻訳を起点から目標への転移(transfer)ではなく、両者自体の変容(transformation)と捉える考え方である(H. バーバの議論。但し、すべてのポストコロニアル翻訳研究がこの立場というわけではない)。

以上が西洋の翻訳研究における大きな論点である。繰り返すと、①等価を基底概念としつつ、それを解体しようとする、②目的、③規範、⑤文化翻訳、そして等価のあり方を美学や倫理から問う④異質化、の主に 5 つの概念である。これらが翻訳研究全体のなかでどのような社会文化的な位置づけになるかについて、見据えておく必要がある。

近時、翻訳研究の欧米中心主義が内的視点から批判されており、東洋へも眼差しが向けられつつある(going East の流れ)。例えば、Wakabayashi & Kothari (2009) では、Chung (2005) の「国際的転回」(international turn)を承けて、主にインドの研究者による非西洋の研究を紹介している。また、van Doorslaer & Flynn (2013) は西洋の研究者による欧米中心主義の自省的な批判を展開しており、例えば、ゲンツラーはマクロ的転回(macro-turn)として起点＝目標というパラメーターを非欧州言語にすべきであること、ミクロ的転回(micor-turn)として両パラメーターを国家よりも下位のコミュニティ(都市や、都市内部の離散コミュニティ、あるいは個々の家庭の世代など)に設定するといったように (Gentzler, 2013)、このような潮流はこれまでの翻訳研究の前提を大きく揺さぶろうとしている。

このような流れのなかで、①等価、②目的、③規範、④異質化、⑤文化翻訳という概念がどのようなコンテキストで、どのような否定項・対立項を措定し、どのようなイデオロギーを有しているかについて、ここで簡単に見ておきたい。以下の (1) から (5) の議論はピム(2010[2010], 2011)に拠るところが大きい。

(1) 等価

等価とは基本的には $A \doteq B$ という等号で結ばれた左辺と右辺の等価値関係を言う。そしてこの A と B のパラメーターは広義に解するとテキスト、言語、社会を取ることができるが、パラメーターが明瞭に区別された A, B として認識されること、翻訳はテキストを訳す行為として位置づけられること、往々にして翻訳者の母語へ訳し、翻訳者の母語社会へ受け入れることが多いために、A が他者化され向こう(A)からこちら(B)へ移すというメタファーが働く。したがって、等価には起点・目標の二項対立への傾注、(翻訳者である)人よりもテキスト間の関係、意味(価値)への固執、転移の概念を包含するというイデオロギーを帯びやすい(cf. ピム, 2011)。

このようなメタファーが働くコンテキスト内で、欧州において等価概念は有益性があつたし、今もまだあつている。勢力均衡(cf. 1648 年のウェストファリア条約以来)を背景にした対等な国家間関係の樹立の必要性、多言語状況下における近代国民国家内での統治の必要性、あるいは時代が下って 1960 年代、70 年代では欧州統合において超国家的法律や統治のための翻訳が必要となり、「法的等価」(legal equivalence)が謳われたこと(言語平等主義という法的擬制)、さらには人類学などの展開による文化相対主義を背景にした文化間の対等・平等の観念、科学

や文化の対等な知的交流の必要性、キリスト教福音主義の伝道の必要性と適合性など、西洋文化拡張主義に適った概念装置であったし、今もなお有効性がある。

その有効性を揺さぶり解消し駆逐しようと企てたのが目的(スコパス)理論や規範理論である。理論的には、パラメーターの上記 B のうちの「社会内での機能」に焦点化した議論で、目的理論の場合は等価の適用範囲を限定的にする方向で、規範理論の場合は等価の適用範囲を拡大し有名無実化する方向で議論を展開した。では、その社会的背景は何か。

(2) 目的

目的(スコパス)理論とは、翻訳が目標側(上記 B=右辺)で有する機能や目的を達成するように、翻訳を行うべきだとする考え方で、起点テキストはあくまでも情報提供機能を担うのみであり、翻訳という新たなコミュニケーション行為によって目標側の読者に起点テキストの情報を目標言語によって伝達するというものである(藤濤, 2007)。したがって理論上は起点テキストの訳出方法は何通りもあり、目的に合わせて説明を加えたり、新バージョンを作成したりするなど、翻訳者の役割を拡張することを認める考え方で、翻訳的行為(translatorial action)とも親和性が高い。このように翻訳者の役割拡張を前提とした理論が必要だった背景に、教え子が就職先で翻訳以上のことを要求される状況を技術翻訳の大学教員が認識し、ターミノロジーやプロジェクト管理などを含んだローカリゼーション産業も射程に入れた理論化を図らなければならなかったドイツでの事情が考えられる(ピム, 2011)。フェルメール(H. J. Vermeer)、ホルツ=メンターリ(J. Holz-Mänttari)、ノード(C. Nord)などがその推進者であり、ドイツでフェルメールに学んだ藤濤も日本でこの理論に基づいた研究・教育を行っている。

1980年代のドイツでこの理論が必要だった理由は、ドイツで長い歴史を持つ学部(特にフェルメールがいたハイデルベルクやゲルメルスハイムなど)だけでなく欧州内で既存の技術専門学校が大学制度に組み込まれる状況の中、翻訳者や通訳者の養成が十分に「学問的」で独立した学問領域を成すのにふさわしいかどうか議論され、翻訳者は言語テキストの再生・再現だけを行っているのではなく、異文化コミュニケーション行為を広く行っているのだ、と強く訴える必要があった。このような政治的動機もあって、既存の翻訳概念、等価、言語学を対立項として立て、翻訳研究(ないし、ここでは翻訳学)の独立性を弁護し、それは成功した。しかしながら、この学派は創設時の背景事情を超えて進化できなかつたとピムは位置づけている(ピム, 2011)。以上より、等価を狭義の翻訳概念、スコパスに適った翻訳を広義の概念、さらにその周囲に異文化コミュニケーション行為があると位置づける意図がここにあることが明確に読み取れる(藤濤, 2007, p. 163)。前述のステッコニの議論からすると、この目的(スコパス)理論は仲介を前景化させているものだと言え、翻訳の国際化やローカリゼーション、視聴覚翻訳や広告翻訳といった新たな翻訳ジャンルの潮流を考える際には、翻訳行為の多義性・多面性・多様性・多層性を直視したうえで、目的のみに議論を還元・縮減するのではなく、「役割拡張」の論点と関連させて翻訳ジャンルごとに緻密な議論を慎重に進める必要があると言えよう。

(3) 規範

等価概念を解体しようとするもう一つの企ては、1970年代から80年代に文学分野で興った翻訳規範論である。これは、あらゆる翻訳には等価があると操作的に定義したうえで、起点テキストと目標テキストのシフトを同定し、そこから目標社会における翻訳のあり方を規範として抽出し、さらにそのデータを蓄積して翻訳法則を導出するというプロジェクトである。これが生じた理由は、実証主義的科学観が根強い西洋の土壌のなかで、翻訳行為に法則性を見出すという学問の科学性を追求しようとしたのが一つ。もう一つはこの学説が生じたのがイスラエル、旧チェコスロバキア、オランダ、ベルギーという欧州の中でもマイナー言語諸国であり、メジャー言語である英語、ドイツ語、ロシア語からの文化流入が多くあるため(一連のこの学派の議論の源流がロシア・フォルマリズムにあるのもこのことの必然でもある)、必然的に自分たちの社会である目標側の多元システム内で翻訳が果たす機能・役割が重視される(多元システム論)とともに、目標社会内で働く翻訳規範を重視した議論を行うことで、等価イデオロギーを打ち破り、目標言語・目標社会の優位性を説く議論が展開することが、当然の成り行きだったこと、以上の二点が考えられる。前述のステッコニの議論でいうと左辺と右辺の差異がことさら強調された主張だと言える。このように、翻訳規範論はスコポス理論とほぼ同時期に興ったが、欧州内での地政学的な違いから、目標重視の志向性の動機は異なっている(記述的翻訳研究および規範理論については、河原, 2015a 参照)。

ではいわゆる欧米の主流国では、等価イデオロギーの内部で何が起こったか。等式の右辺と左辺の力学が政治的に問われることになるのが、次の異質化の問題系である。

(4) 異化(ないし異質化)

翻訳のあり方は2000年以上にわたって、直訳 vs. 意訳という二項対立図式であったことはよく知られた事実であるが(Munday, 2008, pp. 19-23)、単なる直訳か意訳かというテキストレベルないしコミュニケーションレベルの問題を超えて、政治論や文化論、美学や倫理にまで議論を展開・昇華しているのが、異質化・受容化という問題系である。

そもそも翻訳を意味や意図の伝達・コミュニケーションと考えるならば、目標言語の規範に従ってわかりやすく翻訳テキストを産出すれば事足りるはずである(受容化翻訳)。しかしながら、そのように考える背後には起点社会と目標社会が言語間階層においても社会(国家)間階層(覇権関係)においても対等(つまり広義の等価)であることが前提となるわけだが、ほとんどの場合、この前提を共有した翻訳状況は存在しない。その意味で、ピムが等価という想定は歴史的に発生した翻訳者・翻訳利用者の共通認識であり、多くの状況で費用効率が高いと主張し、歴史的共通認識として幻想という形で等価を積極的に認める(ピム, 2010[2010], pp. 63-64)というのは正鵠を射た見方であると言える。だとするならば、等価イデオロギーに対する思弁的な挑戦とその実践的翻訳論が展開されるのは当然である。

また、そもそも近代合理主義を体現する人間が、明確な合目的性と社会規範(言語規範や翻訳規範)を明確に意識し、それらに従って理性的、分析的、客観的、中立的に言語を操り、翻訳を实践するというある種の共同幻想(イデオロギー)^{註9}が翻訳研究に付き纏うのであれば、——思想的ナルシズムを極力排除して平明に言うならば——言語や社会に本来的に内在する、そして

他者のみならず自己の中にも確かに存在する異質性を認識・自覚し、(1) 異質なものを積極的に受容して自己(の言語)を鍛えたり、(2) 異質なものと出会いを通してより真の言語に近づくことを説いたり、(3) 異質なものに正面から向き合い対話する倫理を強調したり、あるいは(4) 他者の異質性を受容しつつ尊重して自文化中心主義を自己批判したりする、という知的な営みはその共同幻想を打ち砕く好機となると言えるだろう。このような概括に基づいて俯瞰すると、(1) ドイツのシュライアーマハー(F. Schleiermacher)がドイツ・ロマン主義の下で異質化翻訳を説き(1813年)、(2) ドイツのベンヤミン(W. Benjamin)が逐語訳を推奨しつつ純粹言語について説き(1923年)、(3) フランスのベルマン(A. Bernan)が翻訳の否定分析論を説き(1984年)、(4) アメリカのヴェヌティ(L. Venuti)が異化戦略を説いた(1995年)のも、西洋の翻訳(研究)史のなかで自然な流れであろう。

具体的なコンテキストを見ると、(1) 主にラテン語からの受容化翻訳を行っていたフランス・ナポレオンの文化的覇権に対抗する形で、シュライアーマハーはドイツ・ロマン主義下では主にギリシア語を対象に異質化翻訳を推奨した(Schleiermacher, 1813/1963[2004])。当時のドイツは異質な要素の移入によってドイツの言語・文化の発展を図ろうとしていたのである。

次に、時代が1世紀半以上下ったフランスでは、(3) ドイツ・ロマン主義的翻訳理論をフランス語で導入しようとしたベルマンは、対話の哲学(E. レヴィナスや J. ラカンなど)が盛んであった同国において他者に対する文化的開放性を掲げ、倫理的な立場から異質化を推奨した(Bernan, 1984)。

アメリカ大陸へ目を転じると、別の目論見で異質なものの取り込みを企てる考え方が浮上した。それは、(4) 純粹に逐語訳や直訳による異質性のある翻訳をするということではなく、(ピム, 2011の言葉を借りると)やや奇妙な文にするという戦略(精確には、異質同化だけでなく、同質異化も導入する戦略)によって翻訳者の可視性を高め、翻訳に対する社会的認知度を高めつつ、アングロ・アメリカ文化における少数言語・少数文化に対する認識をも高めることで自文化中心主義的なアメリカの主流文化を自己批判するという動きを示したのがヴェヌティだった(Venuti, 1995)。これは自らの言語(英語)を発展させるという契機とは正反対に、英語の覇権に対する抵抗、自文化中心主義への内部からの抵抗を意味し、その意味でドイツとは等価等号の右辺と左辺が逆転した関係での異化戦略の主張であると言える。

このように、前述のステッコニの言う差異が強調される異質化の議論において、等価イデオロギー内部でも等号の右辺と左辺との複雑な力学や、あるいは周辺諸国との関係性のなかで、等価のあり方自体が根本的に問い直されてきたと言える。したがって、シュライアーマハーが‘Dolmetscher’(商業テキストを翻訳する者=通訳者)を‘Übersetzer’(学問・芸術系のテキストに携わる者)と峻別し、コミュニケーションに資する翻訳を行うのが前者と位置づけ、後者については翻訳とは「高度に創造的な地平であって言語に新たな命を吹き込むもの」(Schleiermacher, 1813/1963[2004], p. 44)として重要視したのである。ここから翻訳に美学、倫理、使命などと言った異次元の地平で等価のあり方が議論されることになる(ドイツでの具体的な展開については、三ツ木, 2011が非常に詳しい)。

最後に、等価イデオロギーにおける右辺と左辺の二つのパラメーター自体を解消しようとする

動きが、次の(H. バーバ流)文化翻訳の流れである。

(5) 文化翻訳

もともと文化翻訳の概念自体^{註10}は、特定の文化の「意味」を解釈し、それを他者へ伝達するという、文化人類学における研究営為を指す言葉として使用されてきた。ギアツ(C. Geertz)は、様々な文化的事象は、共同体の成員にとっての「意味」を運ぶ「象徴」であり、「文化」とは、そうした象徴の結束性を持った連なり(広義の「テキスト」)であるとした。人は、生についての知識や生に対する態度(すなわち「意味」)を、そのような象徴の中に読み取り共有し、それを通して生を意味付けしていると捉えた (Geertz, 1973)。「文化の翻訳」とは、そうした特定の共同体の成員が織り出すテキスト、言い換えれば、彼ら彼女らが書いたテキストの中に、彼ら彼女ら自らがどのような「意味」を読み取っているかを読み取る行為、解釈を解釈するという多層的な解釈の過程自体を指している(河原, 2013)。この流れを汲むものとして、ギアツが提唱した厚い記述(thick description)に倣い、厚い翻訳(thick translation)^{註11}が提唱されている (Appiah, 1993; Hermans, 2003, 2007)。この意味での文化翻訳概念は、特段、等価概念を解消するものではない(分厚く説明するという観点からは、前述のステッコニの言う仲介の側面が強調されていると言えよう)。

ところが、文化間の関係を翻訳に照らして研究するという意味での文化翻訳の流れがある。これは脱植民地化や移民の置かれた二つの社会・文化の間にある異種混濁性の立場から、等価の等式の右辺と左辺を混合し重複させ、文化複合体として捉える見方である。1994年にインド人であるバーバ(H. Bhabha)が主張した考え方で、ポストコロニアル社会では宗主国と植民地とが文化的複合体を成し、一方から他方への文化の転移ではなく、両文化が変容するのだ、という主張である。これは等価図式でいう左辺と右辺を解消するものであり、起点テキストと目標テキストを比較対照するといった手続きを採らないのが特徴であると言え、最も急進的に等価を解消する考え方であると位置づけられる。このように見ると、ギアツ的な人類学の発想と、バーバ的なポストコロニアルリズムとの発想の違い、等価の位置づけの違いが鮮明に読み取れるのである。

*

以上のように「等価」概念をテキストだけに固定・固執せず、言語や社会にまで広げてみると、等価を支える左辺と右辺の非対称性への気づきから、等価に対する挑戦を西洋内部の中心あるいは周縁から、そして西洋の外部から突きつけてきた主な学説の社会文化史的コンテキストが詳らかになってくることがわかる。このように時代背景や社会的背景を抜きにして学説は論じえないし、また、各学説が何に言及指示し、何を合目的性として掲げ、何を批判の対象にしているかを検討しつつ、その反面、何が意識に上っていないかを社会文化史的コンテキストと照らし合わせながら検証していくことが必要である。

4. 翻訳の多次元的な等価イデオロギー

つぎに、以上の議論をさらにマクロな視点から捉え直すことで、「翻訳の多次元的な等価イデオロギー」を検討する。方法論として、そもそも「等価」がどのように捉えられたかの社会文化史的な

マクロな視点に立って、等価を3次元で測定する。

上述したように、等価とは基本的には $A \approx B$ という等号で結ばれた左辺と右辺の等価値関係を言う。そしてこのAとBのパラメーターは広義に解すると、①テキスト、②(変種レベルを含む)言語、③(国家を含む)社会を取ることができる。この3つのパラメーターが3次元を構成すると測定したうえで、等価を次のように再定義する。

- ・狭義の等価とは、従来の翻訳諸学説が説く、①原文と翻訳との(語用論的な、構築的な)テキスト的等価のことを指す。
- ・広義の等価とは、②(言語変種を含んだ)言語の政治的・権力的階層の序列における等価のことで、対等・対称(だと測定される)ならば等価、対等でない・非対称(と測定される)ならば非等価と定義する。同様に、③その背後にある起点社会と目標社会の政治的・権力的階層の序列における等価も同じように定義する。

狭義の等価(①テキストの等価)と、社会的階層における等価の議論(②言語的・③社会的コンテキストの等価)の議論が連動すると想定し、次の三者関係を「翻訳イデオロギー」の問題として定位し直す(類像・指標・象徴については註2を参照)。

- ・等価の類像的側面——狭義の等価(①テキストの等価)
- ・等価の指標的側面——広義の等価(②言語的・③社会的コンテキストの等価)
- ・等価の象徴的側面——等価イデオロギー(等価意識)

以上を踏まえて、西洋の翻訳研究の主要論点(問題系)を、(1) 異質化、(2) 等価、(3) 目的、(4) 規範、(5) 文化翻訳、の順で再検証する。

(1) 異質化・受容化の問題系

この根源的二項対立は人類の翻訳史以来存在すると言ってよい。これを共時的な原理論として平板に捉えるだけだと、「単なる技術論の集合」(三ツ木, 2011, p. 12)となりかねない。そこで若干ではあるが、ドイツの翻訳史的一幕と、付随的に日本とアメリカの翻訳状況を検討し、歴史の中での翻訳方略の選択の変遷を辿ったうえで(三ツ木, 2011 と水野, 2011)、現代の議論を検証する。

まずは三ツ木(2011)によってドイツ近代の翻訳思想を簡単に振り返ると、フンボルトは「理屈抜きの忠実」に基づく翻訳方法で文化の仲介者としてのドイツ民族のため、ギリシア古典と近代ドイツを結びつけようとした。ドイツの言語および国を他の諸国と対等にするため、つまり等価化するための知的動きだったと位置づけられる。シュライーマハーは政治的にはバラバラな当時のウィーン体制下であって、言語だけは統一したいという気運のなかで、ロマン主義に基づいてドイツ語の改良を図る一環として異質化を提唱したという動き(巨大な翻訳センターの構想)を示した。これは勢力均衡体制下でのドイツの国力を高めるという広義の等価化への志向性と、異質化の提唱と

いう狭義の等価のあり方の議論とがつながるものである。

他方、そのようなドイツ的伝統と忠実原理が否定され、自由な翻訳手法が優勢となったのが、次の2人の時代である。まずニーチェは異国の形式を盲目的に模倣するのではなく、翻訳における今ここを強調し、自由な文体による新たな文体を創り出すことを主張、ヴィラモーヴィッツは古典文献学の立場から古典語のリズムの翻訳の不可能性を理由として古代の精神・魂・理想を翻訳することをよしとした。そういう意味で、この時代は古典言語からの解放、自由という意味で自由訳が選ばれたと言える。

また今度はその反動として、文学者集団「ゲオルゲ・クライス」は理論的な根拠のない「秘密のドイツ」という神話を構築し、かつての翻訳思想が復活する。その流れのなかで、ベンヤミンは反神話的翻訳論として純粋言語論を提唱し、相互の言語の補完という目的のため、原作の言語の表現への忠実性を主張した。忠実・自由という対概念の転調として、二言語を超える上昇運動としての翻訳を唱えた。以上が、途中変転もあったが、近現代ドイツの翻訳思想史の異質化・受容化の系譜である。

目を日本に転じてみると、明治・大正期の日本では、起点言語志向の規範が当時優勢で、原作・原文を尊重するため、そして新たな文体を創造し、翻訳による文体を介して日本語を改良・改造しようとする動き(直訳の系譜)が強かった(詳しくは、水野, 2007, 2011 など)。

では現代翻訳理論における異質化の主張はどのようなものか。まず、半世紀以上前になるがいま一度、ベンヤミンの立ち位置を確認すると、彼は目標社会中心の神話の否定から入り、異言語を超越し純粋言語を希求した。つまり、言語階層を超越したある意味で原言語を想定した意味での異質化を唱えたのである。そしてベルマンは、そのベンヤミンの議論を承けつつも、立ち位置としては目標側に立つ翻訳者として、翻訳者の倫理を模索する立場から異質化を訴えている。これには異質性を誠実に受容することで自己を向上させるという目的(合目的性)が窺える。また、ある意味においては目標社会の階層を向上させるというシュライアーマハーが抱いた狙いも受け継いでいるようにも読み取れる。これは現代の日本が、かつては脱亜入欧を掲げて異質化方略を有していたが、社会がある程度成熟した近年は、古典新訳の動向などの同化的な翻訳の動きもある。これは目標社会側の階層を向上させる、あるいは、異質な言語・文化を受容することで自己を向上させる動機が日本では薄れつつあることとも連動してのことだろう。

他方、現代のアメリカのヴェヌティが異化を唱えているのは、目標側の自文化中心主義的傾向に修正をかける狙い(合目的性)からであり、むしろ目標社会であるアメリカの英語一辺倒の言語文化に多様性を付与し、英語や主流文化の階層的優位性を解消させる意図もある。(したがって、現代日本にヴェヌティの論調を導入するのは、難しい面もあるかもしれないが、現代日本にアメリカ的要素を多少なりとも見出すならば、ヴェヌティの論調での異化を主張することもできよう。)

このように、それぞれの論者の意図は自身の置かれた社会の国際的なマクロ社会経済状況によって異なるが、異質化を唱える知的運動はどの時代にも脈々とあり、それぞれの歴史の脈絡の中で理解すること、そしてそういった歴史的な理解を踏まえて、現代の言語文化状況への提言のひとつとして異質化を訴えることは、グローバル化が急進している今、等価の両辺の不均衡を崩して新たな秩序を生み出すためには必要な動きであると言えよう。と同時に、翻訳の効率性や経済

性を考えることもバランス的には必要である。学術・思想上の理念と現実の実務上の要請とをうまく均衡させる知恵が最終的には問われることになる。

(2) 等価の問題系

これまでの本稿全体の趣旨に鑑みると、翻訳を実践する際には努力目標として等価が掲げられ、翻訳する人にとっても翻訳を利用する人にとっても、等価はある種の期待値になっている面が強い(等価はイデオロギー化されていると言える)。しかし、必然的に等価には様々な負荷性がつきまとうことも確かである。したがって、等価を声高に提唱する動きに関しては、その背後に隠されたイデオロギーにも目を向ける必要がある。例えば、伝道主義を推進する一環として E. ナイダが唱えた動的等価(機能的等価)には、**SIL**という宣教団体の有するスコpos(合目的性)が負荷となっている(cf. Handman, 2007)。換言すると、目標社会の改変を目論んだうえで、そのことを隠蔽するために等価という概念を利用している面(イデオロギッシュな面)がある。つまりは、学説の背後にある信奉体系・象徴体系を理解してはじめて、等価イデオロギーの真の社会的意味が詳らかになるのである。

また、そのような特定の強いスコposを掲げていない学説であっても、これまで提唱されてきた言語等価論は、マクロな言語階層や社会階層において、等価等式の右辺と左辺の対称性(等価性)を前提にした議論であった。したがって、常に社会等価論の議論も念頭に置いた等価性のあり方について考える必要を再度確認しておきたい。

また、等価を測るための基準を客観化することは原理的にありえないことも、等価の構築性に鑑み、原理的に導出できる(等価の本質主義 vs. 構築主義については、河原, 2014a 参照)。翻訳を記述する目的であっても、翻訳の教育・評価を行う目的であっても、あるいは翻訳を実践するとき等価について考える場合であっても、等価の具体的な判断は個々人の基準に委ねられてしまう。統一された理論的な準拠枠は原理的には提案しえないと言わざるを得ない。

しかしながら、これまでの言語等価性の諸理論(等価性・シフト・方略・プロセス)は、翻訳行為全体で各論点がどのような位置を占めるのかについて明確に示している。等価をめぐる何が問題や争点となるか(位相・質・程度・方向性など)、そしてそれを全体のなかでどう定位すればよいかを体系的・有機的に見定めることができれば、バランスの良い判断が可能となる。

(3) 目的(スコpos)の問題系

翻訳における目的理論は、起点言語重視から目標側における翻訳の社会的機能を重視するという(左辺<右辺)、ある意味で等価を狭く解し、等価を解体する考え方であることはこれまでの議論で見えてきた。繰り返しになるがまとめると、目的理論では合目的性として翻訳のコミュニケーション重視と翻訳者の役割拡張を掲げる。したがって、その反面、非合目的性として翻訳行為の多面性の中から合目的性というスコposのみを前景化し他の諸側面を後景化させてしまうため、等価の多次元性・多面性への配慮が薄れてしまう可能性があるし、合目的性の陰に隠れて、特定の非合目的性が隠蔽される恐れもある。そういうイデオロギッシュな面を認識したうえで、スコposをも考慮に入れた翻訳実践のあり方を模索するとバランスが図れると言える。スコpos理論においては、

何が選択的・主体的にスコ-posにされるのか、そのことによってどのような創出的な(そして無意識の)効果が発生するかについても検討する必要がある。

(4) 規範・記述的研究の問題系

他方、翻訳規範論は等価を広く捉え、翻訳にはすべて等価性が認められるとするため、スコ-pos理論と同様、実質的には等価を解体する考え方でもある。この理論では等価を(暗黙裡に)前提可能なものとして認めるという思考手続きをとるため、目標社会の独自性(と時として優位性)を目標社会内部で同定・確認し、目標社会を重視する方向へ議論が発展する可能性もある(左辺<右辺)。翻訳者を規制する規範はあることは確かだが、目標言語が置かれたマクロ社会文化史的コンテクストを考慮したうえで、言語階層・社会階層における起点側との対比によって相対的に決まることも念頭に置かなければならないだろう(詳しくは、河原, 2015a)。特に、この理論が生起したコンテクスト自体、マクロな言語階層・社会階層において起点側より劣位にある欧州の非中心地域であったことを想起されたい。学説のイデオロギーと学説が生起するコンテクストにおける地域や国のイデオロギーとが緩い形で連動していることがここで看取されると言える(なお、多元システム論に対する齋藤, 2012 と、翻訳規範論に対する佐藤, 2008, 2014 はいずれも、イスラエルのこれらの議論に対し一定の留保を付したうえで採用している)。

(5) 文化翻訳の問題系

論者(G. スピヴァク、T. ニランジャナ、H. トリヴェディ、H. バーバなど)によって温度差はあるが、翻訳研究においてはいずれも非欧米地域の出身者による、欧米における主張である。つまり、起点=目標という二項関係を痛烈に意識し、その二項対立を解体・解消することで自らの周縁性をも解消するという動機ないしスコ-posが窺える主張である。特に H. バーバは立ち位置としては二項の狭間ないし第三の空間を措定しており、移民であるアイデンティティを前面に出した主張内容であると言える。

文化人類学の文化翻訳の概念を敷衍して翻訳研究に応用しようとした厚い翻訳の議論も、基本的には起点・目標という二項における優劣関係を意識し、その権力格差の是正を促す主張を展開している。そういう意味で、どの主張も言語テキストのみではなく、マクロなレベルでの起点・目標の間の言語階層や社会階層を意識した議論だと言える。

5. まとめ

以上、ごく簡単に起点=目標(左辺=右辺)間のマクロ・レベルにおける言語階層や社会階層の視点から、(1) 異質化、(2) 等価、(3) 目的、(4) 規範、(5) 文化翻訳、について見てきた。西洋の翻訳研究におけるこれらの重要な問題系の諸学説がどのようなイデオロギーを帯びているか、いま一度、チェックし直すことを通して、翻訳研究の全体に照らし、社会文化史的なグローバルな視点から諸学説のイデオロギーを検証する作業も必要かもしれない。翻訳研究の諸学説が何を前提とし、何を合理化(イデオロギー化)し、何を意識化していないか(どのような創出的効果を発

しているか)について、等価の類像的側面(①テキストの等価)、等価の社会指標的側面(②言語的・③社会的コンテキストの等価)、等価の象徴的側面(等価イデオロギー=等価意識)について絶えず問い直しをすることが、翻訳研究の発展につながる契機ともなるであろう。そのことを関数式で確認する。

翻訳の本質: 三面的間コンテキスト性/間テキスト性

②言語的・③社会的コンテキストの等価 $TT^e=f(S, T, I)$

①テキストの等価 $TT^e=f(s, t, i)$

*S=起点社会・言語、T=目標社会・言語、I=(システムとしての)翻訳者

*s=起点テキスト、t=目標テキスト、i=(個性に注視した存在としての)翻訳者個人

②言語的・③社会的コンテキストの等価(対称性・対等性)について、(1)異質化、(2)等価、(3)目的、(4)規範、(5)文化翻訳、の諸理論を考えながら個別論点を検証していくと、学説言説のテキストと学説を取り巻くマクロ・コンテキストとの関係がうまく見渡せることになる。(1)「異質化」では、(S)と(T)どちらが優位であることを前提としているのか、どちらをより等価ないしそれ以上に高める意図を持って主張しているのかを吟味する。(2)「等価」では、(S)と(T)を等価(対等)だと見なすことの背後にあるイデオロギーは何かを見定める。(3)「目的」では概して(T)の優位性が主張されるが、そのことのイデオロギーは何か、特定のスコプスを選択することのイデオロギーと併せて検討する。(4)「規範」でも概して(T)の優位性が主張されるが、規範が規定する一枚岩的なコミュニティは一体何か、その正体も明らかにしつつ、規範の解明行為のイデオロギーをも再帰的に分析する。(5)「文化翻訳」では、どのような主張(戦略)によって(S)と(T)を解消しようとしているのか、その主張のイデオロギーをも自己分析する必要がある。

さらに、もう一つの一面である(I)をも見定めなければならない。(I)=システムとしての翻訳者である。異言語間の仲介役として人類にとって不可避な存在である翻訳者をシステムとして捉える見方である。この(I)が(S)と(T)のどちらに立ち位置を定めること措定して理論化するかによって、理論の方向性も変わり得る。例えば、ティモツコのように(S)か(T)かのどちらかに不可避的に立ち位置を定めるのが翻訳者であるという立場(Tymoczko, 2003)、マンデイのように(I)は不可避的に介入者であるという立場(Munday, 2007)、それに対し、バーバのように(S)でも(T)でもない第三の空間を措定すべきだという主張(Bhabha, 1994)など、さまざま主張される。(I)をどこに定位するかにより、その学説のイデオロギーも表出される。以上のような視点に立って、複眼的に諸学説を考察すると、より翻訳研究の全体の布置が鮮明に見定められることとなろう。(本稿では、s=起点テキスト、t=目標テキスト、i=(個性に注視した存在としての)翻訳者、といったマイクロコンテキスト的な次元を論じる「翻訳者個人翻訳の多次元等価イデオロギー—社会、テキスト、文体とアイデンティティ」は割愛する。)

本稿が分析した西洋の翻訳研究の5つの論点は、代表的な西洋の翻訳観を反映したものである。これらの主張の合目的性と、イデオロギー化して背景化している非合目的性を西洋の社会文化史のなかに置き、これらを相対化し、距離を措いて眺めることで、21世紀の今・ここ日本におけ

る翻訳研究の合目的性と非合目的性(イデオロギー性)をも再帰的に批判できるのではないかと考える(社会記号論による再帰的な自己批判原理については、河原, 2015b 参照)。これは、単に 21 世紀の日本の視点から西洋の翻訳諸理論を他者化し、いずれかに優劣をつけたり一方を排除したり、あるいは諸批判理論に頻繁に見られるように自らを正当化しナルシスティックに論じたりするものではない。自ら定立した理論によって自己批判することにより、自らのイデオロギーや意識の限界を詳らかにし、より洗練された理論構築を目指すものである。その意味で、本稿で見てきた西洋の翻訳諸研究を日本に受容する(つまり広義の翻訳を行う)うえで、①等価裡に受容が可能か、②受容・援用の目的は何か、③受容する際の日本のアカデミック規範は何か、④そのまま西洋の理論を受容するのか(異化)、それとも日本の思想や知の伝統に同化させるのか、⑤その際、西洋の諸理論を社会文化史のマクロコンテクストのなかでどのように文化として解釈するのか、といった、自らが定立した理論による検証も有効であるだろう。かように、これからの理論には、自己批判原理を内在させる必要があることを本稿は唱えるものである。

※ 本稿は、立教大学大学院独立研究科異文化コミュニケーション研究科提出博士学位請求論文「翻訳等価性再考—社会記号論による翻訳学のメタ理論研究—」(全 353 頁、2015 年 3 月)を、本稿テーマに即して編集した研究報告を趣旨とした研究ノートである。

.....
【著者紹介】

筆者紹介: 河原清志 (KAWAHARA Kiyoshi) 金城学院大学文学部准教授。専門は通訳翻訳研究／学・社会記号論・メディア英語研究・言語学／言語思想論。
.....

【註】

- 1) Translation Studies (TS) という英語に対して、翻訳研究(例えば、ベイカー・サルダーニャ, 2013[2009])、翻訳学(例えば、マンデイ, 2009[2008])、トランスレーション・スタディーズ(例えば、佐藤, 2011a)などの訳語が当てられている。本稿では、翻訳研究は TS の一般的な訳語、翻訳学は一つの自立的・自律的・独立的な学問分野を志向する概念としての訳語、トランスレーション・スタディーズは西洋の(通訳研究を含む)翻訳研究を志向するものと定位し、さしあたり「翻訳研究」を統一的使用することとする。なお「翻訳論」という語は、他の分野の研究者が翻訳を論じたり、翻訳関係者が理論的地平ではないところで翻訳を論じたりする場合に使っている傾向があるようである(例えば、広田, 2007; 早川, 2013)。
- 2) 「翻訳方略 (translation strategy)」という用語は多義的であるが、①記述的スタンス (descriptive stance) vs. ③関与的・介入的スタンス (committed/intervenient stance)、そして、②教育・評価的スタンス (pedagogical/ evaluative stance) の大きく 3 つの翻訳研究のスタンスによってその概念定義や主張内容は異なりうる。また、翻訳行為全般に対する巨視的なものか、個々の翻訳の訳語選択における意思決定に関する微視的なものか、という分類も可能で、これら 2 つを掛け合わせると、次のマトリックスになる(詳しくは、河原, 2014b)。

表 1: 翻訳ストラテジー論の布置

スタンス	①descriptive (規範; normative)	②pedagogical/evaluative (模範; prescriptive)	③committed (介入; intervenient)
ベクトル	retrospective ←————→		prospective
	回顧的(後向き)		展望的(前向き)
巨視的・全体的 (macro, global)	志向性 (起点 vs. 目標)	指針 (起点 vs. 目標)	戦略 (抵抗 vs. 受容)
微視的・局所的 (micro, local)	方略 客観的シフト分析	手順と技法 目的達成の具体的方法	戦術 具体的攻略方法

「翻訳ストラテジー(strategy)とは翻訳者が意識的にシフトを起こさせる、または最小限に抑える転換操作のことである」と河原(2014b)では概念定義し、その下位範疇に「方略」「戦略」などを位置づけている。が、本稿では一般的な意味で使う場合を「方略」とし、L. ヴェヌティに見られるように自説を主張するうえで介入的スタンスを採っている場合には「戦略」という訳語を当てている。

- 図 1 に “icon” ”index” ”symbol” という記号論の用語を使用している。これは、C.S. パースの用語(類像、指標、象徴)に倣ったものである。類像性は対象 O と記号 S とが同一/同等/類似/相似的であることを示す記号作用であり、指標性は S が O の存在を示す作用、象徴性は S と O は恣意的な関係であることを示す作用をそれぞれ表している。
- 新約聖書が書かれた言語は、「イオニア化したアッティカ方言」がコイナー——すなわち、ヘレニズム及びローマ時代の「共通の」言語——となったものである(ケスター, 1989[1982], pp. 136-153)。
- 但し、聖書の神聖性と聖書が記された言語(ヘブライ語、コイナーギリシャ語、のちに翻訳されたラテン語)の神聖性とは明瞭に分けて論じる必要がある。社会言語学的な言辞には両者の神聖性を同一視しているものもあるが(小山, 2012)、これは各時代やキリスト教の諸教派による、言語観や「神の言^{ことば}」(ヨハネによる福音書 1:1)に対する捉え方によっても異なりうる——これは聖書の翻訳(不)可能性にも関連する——ため、神学者の更なる説明を要する。が、それは別稿に譲る。
- なお、“foreignization” と “domestication” の訳語に関し、ヴェヌティ(2011)の訳者解説で鳥飼は「異質化」「受容化」を選んでいる。「外国化」「内国化」を採用しない理由は、「国家」を前提とした議論ではないためであり、また「異化」はその音声を同時通訳で聞いた時に理解の困難さがあるためとしている。そして、「異質化」「受容化」を選んだ積極的な理由も示している。

確かに、ヴェヌティ(2011, pp. 456-457)での鳥飼の主張は的を射ておりそれに従いたいところではあるが、筆者は L. ヴェヌティの主張を検討する際に、「異質化」を下位分類して「異質同化」「同質異化」と称しているため、「異質化」という用語の「質」を敢えて外したり、「受容化」ではなく「同化」を選んだりして造語しやすくするという判断から、基本的には「異化」「同化」という訳語を採用している。そして、シュライアーマハーやベルマンの「異質化」「受容化」の議論とはやや異なり(cf. 水野, 2010, pp. 38-39)、ヴェヌティ独自在戦略的用語としてこれらの概念を導入したことに鑑み、本稿ではヴェヌ

ティの用語には「異化」という訳語を当てている。

- 7) 例えば、差異と類似(あるいは同一性)の関係性について、ベルマン(2008[1984])を翻訳した藤田は訳者あとがきで、「差異のうちに同一性を探りあて、そのことによって差異を際立たせる営み、それこそが翻訳ではなかったか」という問題提起を前面に打ち出している(p. 404)。
- 8) 例えば、「仲介」のメタファーに典型的に示される翻訳観は、翻訳を伝聞あるいは報告された談話だと見る見方である。ヘルマン(2011)は、翻訳は報告された談話・発話であり、「すでに発話された言葉の再現と再配置である」とし、「自由直接話法－直接話法－間接話法－要約的翻訳－省略についての言及」を挙げ、典型的な大部分の翻訳は「直接話法」であり、上記のグラデーションのなかではじめの項目のほうは翻訳者が原作を模倣している場合であることを示し、おわりの項目のほうは翻訳者はより自分の言語使用域で発話し可視的な存在となるとしている。
また、スコパス理論の系譜を汲む伊原(2011)は、翻訳を異文化コミュニケーション行為と捉えつつ、翻訳を話法のコミュニケーション行為として具体的なテキスト分析を行っている。具体的な結論の一つとして、「英語小説内の話法表現が登場人物寄りで直接話法的に和訳されていれば同化で、語り手寄りで間接性が高まれば異化」としている(p. 221)。
- 9) 意味づけ論が意味の不確定性として意味の不可知性を説き(深谷・田中, 1996; 田中・深谷, 1998)、言語人類学系社会記号論が意識の限界や近代理性の限界を説いていること(Silverstein, 1981; 小山, 2011)からして、このような言語に対する捉え方はイデオロギッシュであると言える。
- 10) 加藤(2010)によると、「文化翻訳」は E. E. エヴァンス＝プリッチャードが 1950 年のレクチャーでこの語を使用したことが最初だという。
- 11) アイヌの口頭伝承訳の研究を行っている佐藤(2011b)は、アピア(Appiah, 1993/2000, pp. 389-401)は「他者を尊重しつつ、翻訳される語の文化的コンテクストを読者に理解させる手法として、注や解説を駆使する翻訳を『厚い翻訳』と定義した」としている(p. 200)。

参考文献

- Appiah, K. W. (1993). Thick translation. In L. Venuti (Ed.), (2000). *The translation studies reader* (pp. 389-401). London & New York: Routledge.
- Bassnett, S. & Lefevere, A. (1990). *Translation, history and culture*. New York: Pinter.
- Berman, A. (1984). *L'épreuve de l'étranger: Culture et traduction dans l'Allemagne romantique*. Paris : Éditions Gallimard.
- Bhabha, H. K. (1994). *The location of culture*. London & New York: Routledge.
- Chesterman, A. (2006). Interpreting the meaning of translation. In M. Suominen et al. (Eds.), *A man of measure. Festschrift in honour of Fred Karlsson on his 60th birthday* (pp. 3-11). Turku: Linguistic Association of Finland.
- Chung, M. P. Y. (2005). 'To translate' means 'to exchange'? A new interpretation of the earliest Chinese attempts to define translation ('fanyi'). *Target*, 17(1), 27-47.
- Cronin, M. (1996). *Translating Ireland: Translation, languages and identity*. Cork: Cork University Press.

- Geertz, C. (1973). *The interpretation of cultures*. New York: Basic Books.
- Genzler, E. (2013). Macro- and micro-turns in translation studies. In L. van Doorslaer & P. Flynn. (Eds.), (pp. 9-28).
- Handman, C. (2007). Access to the soul: Native language and authenticity in Papua New Guinea Bible translation. In M. Makihara & B. B. Schieffelin (Eds.), *Consequences of contact: Language ideologies and sociocultural transformations in Pacific societies* (pp. 166-188). Oxford: Oxford University Press.
- Hermans, T. (2003). Cross-cultural translation studies as thick translation. *Bulletin of the School of Oriental African Studies*, 66(3), 380-389.
- Hermans, T. (2007). *The conference of the tongues*. Manchester: St. Jerome.
- Munday, J. (Ed.), (2007). *Translation as intervention*. London & New York: Continuum International Publishing Group.
- Munday, J. (2008/2012). *Introducing translation studies*. London & New York: Routledge.
- Pym, A., Shlesinger, M. & Jettmarová, J. (Eds.), (2006). *Sociocultural aspects of translating and interpreting*. Amsterdam & Philadelphia: Benjamins.
- Schleiermacher, F. (1813). Ueber die verschiedenen Methoden des Uebersetzens. In von Hans – Joachim Störig. (Hrsg.), (1963). *Das Problem des Übersetzens*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.; In L. Venuti (Ed.), (2004). *The translation studies reader* (pp. 43-63). London & New York: Routledge.
- Silverstein, M. (1981). Limits of awareness. (=Working papers in sociolinguistics, No. 84). Austin: Southwest Education Research Laboratory.
- Snell-Hornby, M. (2006). *The turns of translations studies: New paradigms or shifting viewpoints?* Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Stecconi, U. (2004). Interpretive semiotics and translation theory: The semiotic conditions to translation. *Semiotica*, 150, 471-489.
- Stecconi, U. (2009). Semiotics. In M. Baker & G. Saldanha (Eds.), *Routledge encyclopedia of translation studies* (pp. 260-263). London & New York: Routledge.
- Tymoczko, M. (2003). Ideology and the position of the translator: In what sense is a translator “In-between”? In M. C. Pérez (Ed.), *Apropos of ideology. Translation studies on ideology—Ideologies in translation studies* (pp. 181-201). Manchester: St Jerome.
- Vandeweghe, W., Vandepitte, S. & Van de Velde, M. (2007). *The study of language and translation*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- van Doorslaer, L. & Flynn, P. (Eds.), (2013). *Eurocentrism in translation studies*. Amsterdam & Philadelphia : John Benjamins.
- Venuti, L. (1995). *The translator's invisibility: A history of translation*. London & New York: Routledge.
- Wakabayashi, J. & Kothari, R. (2009). *Decentering translation studies*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.

- ベイカー, M・サルダーニャ, G (2013). 『翻訳研究のキーワード』(藤濤文子・監修・編訳). 研究社.[原著: Baker, M. & Saldanha, G. (2009). *Routledge encyclopedia of translation studies*. London & New York: Routledge].
- ベルマン, A. (2008). 『他者という試練: ロマン主義ドイツの文化と翻訳』(藤田省一・訳). みすず書房. [原著: Berman, A. (1984). *L'épreuve de l'étranger: Culture et traduction dans l'Allemagne romantique*. Paris: Éditions Gallimard].
- デリダ, J. (2001). 『たった一つの、私のものではない言葉——他者の単一言語使用』(守中高明・訳). 岩波書店. [原著: Derrida, J. (1996). *Le monolinguisme de l'autre*. Paris, Éditions Galilée].
- 藤濤文子 (2007). 『翻訳行為と異文化間コミュニケーション—機能主義的翻訳理論の諸相—』松籟社.
- 深谷昌弘・田中茂範 (1996). 『コトバの<意味づけ論>』紀伊国屋書店.
- 早川敦子 (2013). 『翻訳論とは何か—翻訳が拓く新たな世紀』彩流社.
- ヘルマンズ, T. (2011). 「翻訳者、声と価値」佐藤＝ロスベアグ・ナナ (編) 『トランスレーション・スタディーズ』(3-21 頁). みすず書房.
- 広田紀子 (2007). 『翻訳論—言葉は国境を越える』上智大学出版.
- 伊原紀子 (2011). 『翻訳と話法—語りの声を聞く』松籟社.
- 加藤恵津子 (2010). 「自文化を書く—だが、誰のために? 『文化の翻訳』をめぐるネイティブ人類学徒の挑戦」山本真弓 (編著) 『文化と政治の翻訳学: 異文化研究と翻訳の可能性』(109-143 頁). 明石書店.
- 河原清志 (2011). 「概説書に見る翻訳学の基本論点と全体的体系」日本通訳翻訳学会・翻訳研究分科会 (編) 『翻訳研究への招待』第 5 号, 53-80 頁.
- 河原清志 (2013). 「文化の翻訳・通訳 cultural translation & interpreting」石井敏・久米昭元 (編集代表) 『異文化コミュニケーション事典』(311 頁). 春風社.
- 河原清志 (2014a). 「翻訳等価論の潮流と構築論からの批評」日本通訳翻訳学会・翻訳研究育成プロジェクト (編) 『翻訳研究への招待』第 11 号, 9-33 頁.
- 河原清志 (2014b). 「翻訳ストラテジー論の批判的考察」日本通訳翻訳学会・翻訳研究育成プロジェクト (編) 『翻訳研究への招待』第 12 号, 121-140 頁.
- 河原清志 (2015a). 「翻訳規範と記述的翻訳研究の批判的検討」日本通訳翻訳学会・翻訳研究育成プロジェクト (編) 『翻訳研究への招待』第 13 号, 1-28 頁.
- 河原清志 (2015b). 「再帰する学問語用論—翻訳理論言説の意識と無意識」立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科 (編) 『立教・異文化コミュニケーション学会 第 12 回大会発表論文集』11-14 頁.
- ケスター, H. (1989). 『新しい新訳聖書概説上—ヘレニズム時代の歴史・文化・宗教—』(井上大衛・訳). 新地書房. [原著: Koester, H. (1982). *Introduction to the new testament: History, culture and religion of the Hellenistic Age. volume one*, Philadelphia: Fortress Press].
- 小山亘 (2011). 『近代言語イデオロギー論』三元社.

- 小山亘(2012)。「等価性、カテゴリー化、言語／翻訳、社会文化：社会、文化、そして言語にとって等価性とは何か」立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科「異文化コミュニケーション研究(Ⅱ)」2012年10月20日配布資料[未刊行]。
- ルセルクル, J-J. (2008). 『言葉の暴力「よけいなもの」の言語学』(岸正樹・訳). 法政大学出版社.
[原著: Lecerclre, J-J. (1990). *The violence of language*. London & New York: Routledge].
- 三ツ木道夫(2011). 『翻訳の思想史——近現代ドイツの翻訳論研究——』晃洋書房。
- 水野的(2007)。「近代日本の文学的多元システムと翻訳の位相——直訳の系譜」日本通訳学会翻訳研究分科会(編)『翻訳研究への招待』第1号, 3-43頁。
- 水野的(2010)。「本アンソロジーを読むために」柳父章・水野的・長沼美香子(編)『日本の翻訳論——アンソロジーと解題』(36-52頁). 法政大学出版社。
- 水野的(2011)。「明治・大正期の翻訳規範と日本近代文学の成立」佐藤＝ロスベアグ・ナナ(編)『トランスレーション・スタディーズ』(69-93頁). みすず書房。
- マンデイ, J. (2009). 『翻訳学入門』(鳥飼玖美子・監訳). みすず書房. [原著: Munday, J. (2008). *Introducing translation studies*. London & New York: Routledge].
- ピム, A. (2010). 『翻訳理論の探求』(武田珂代子・訳). みすず書房. [原著: Pym, A. (2010). *Exploring translation theories*. London & New York: Routledge.].
- ピム, A. (2011)。「歴史上の問題解決策としての翻訳理論」(武田珂代子・訳). 鳥飼玖美子・野田研一・平賀正子・小山亘(編)『異文化コミュニケーション学への招待』(459-477頁). みすず書房。
- 齋藤美野(2012). 『近代日本の翻訳文化と日本語——翻訳王・森田思軒の功績——』ミネルヴァ書房。
- 佐藤美希(2008)。「昭和前半の英文学翻訳規範と英文学研究」日本通訳翻訳学会・翻訳研究分科会(編)『翻訳研究への招待』第2号, 11-38頁。
- 佐藤美希(2014)。「『円本』と翻訳文学規範」日本通訳翻訳学会・翻訳研究育成プロジェクト(編)『翻訳研究への招待』第12号, 1-19頁。
- 佐藤＝ロスベアグ・ナナ(編)(2011a). 『トランスレーション・スタディーズ』みすず書房。
- 佐藤＝ロスベアグ・ナナ(2011b). 『文化を翻訳する』サッポロ堂書店。
- 田中茂範・深谷昌弘(1998). 『<意味づけ論>の展開』紀伊国屋書店。
- ヴェヌティ, L. (2011)。「ユーモアを訳す——等価・補償・ディスコース——」(鳥飼玖美子・訳)鳥飼玖美子・野田研一・平賀正子・小山亘(編)『異文化コミュニケーション学への招待』(434-458頁). みすず書房。

